



る う て る

2010年
11月
No.755

■発行所■
日本福音ルーテル教会事務局広報室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
電話 03-3260-8631

■振替口座 ■00190-7-1734
■ウェブサイト ■http://www.jelc.or.jp
■Eメール ■jelc@jelc.or.jp
■発行人 ■徳野白博 m-tokuno@jelc.or.jp
■印刷人 ■晴文堂印刷株式会社
■定価 ■1部 40円 (郵便料金を含む)

説教

「終わりは始まりである」

「見ると、二人の人がイエスを語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。」

(ルカによる福音書 九章三十一、三十二節)

教会の暦は、「待降節」から始まります。その「第一主日」は、十一月三十日の「聖アンデレの記念日」に最も近い日曜日と決められています。ですから必ず十一月二十七日から十二月三日の間に来ます。その一週間前が「聖霊降臨後最終主日」で、一年の教会暦の最後の日曜日です。また十一月一日は「全聖徒の日」で、この月の最初の日曜日を「全聖徒主日」として、召天者を記念する礼拝などを行っている教会も多いでしょう。つまり教会暦上で

は、十一月は、「終わり」を考える時期なのです。

聖句はイエスが山上で変容された時の記事ですが、イエスの人生は「エルサレムで遂げようとしておられる最期」(即ち十字架上の死)を目指しての生涯でした。この地上にあって、イエスは御自分の死を見据えて、その生涯を歩まれました。私たちもこの地上での「終わり」があります。生まれたその瞬間から、私たちは自分の終わりである死に向かって生きています。



「十年前がんになった時、神様に『三人の子供たちにはまだ手がかります。せめてあと十年生かしてください』と祈ったら、本当に神様は願い通りに十年生かしてくださいました。神様って本当に素晴らしい。」と。そして「だからもう何も思い残すことはない」と言って召されました。

個人的な証をさせていただけます。私は今から七年前に妻を亡くしました。その十年前に乳がんが発見され、その時点ですでに腰椎二ヶ所に転移しており、主治医から「ステージ」で、その頃の五年生存率は二十五%と言われていました。

がんの宣告を受け、しかも最終ステージに入っていると言うことで動揺したと思いますが、それでも五年を超えて生きる可能性が四人に一人あるならば、その一人になれるようにと祈りました。

この時から、妻はいつ終わるかもしれない自分の死を見つめて生き始め、いろいろなことに挑戦しました。まず一つは、その当時在籍していた教会でハーブの演奏会があり、その音色に魅せられて、何人かの女性たちと一緒にハーブを習い始めました。そして何年かの練習の後、

ある年のイースター礼拝で念願の演奏をすることができたのでした。

また、宣告を受けた時、一番下の長女は小学校六年生でしたが、その長女が成人になる数年前、「娘の成人式には自分で着物を着せたい」と考え、着物の「着付け教室」に通い出しました。時々体調を崩し入院を繰り返しながらも続けて、着付けの資格を取りました。そして念願通り成人式の日、自分の手で娘に着物を着付けることができました。

これらのことは、自分の終わりを意識し、与えられた恵みの日々を精一杯生きようとした妻の証しであると思います。結局妻は、がんの発見から十年間生きることができました。その十年目、いよいよ最期の時が近づいていることを告知されたとき、このようなことを私に話してくれました。

「教会手帳2011」

お申し込み先
北海道リスカ教会館 TEL:011-731-7217/FAX:011-747-5979
キリスト教出版センター TEL:03-5269-4900/FAX:03-5269-4911
静岡福音堂 TEL:054-264-0264/FAX:054-264-4161
名古屋福音堂 TEL:052-741-2416/FAX:052-733-2648
広島福音堂 TEL:098-67-0291/FAX:098-67-3309
広島福音堂 TEL:082-228-4914/FAX:082-223-0951
キリスト教出版センター TEL:096-372-3503/FAX:共用
*上記以外も各教会へ

定価 1,100円

風の道具箱

こだわり続ける優しさ

あるエッセイ集で次のような話をみつけました。
「少女がバスの中で、途中から乗ってきたおばあさんに席を譲ろうとしました。腰を浮かせ、まさに声をかけようとした時、前の席の男性がすっと立ち上がり、先に席を譲ってしまったのです。気まずい思いで、少女は席に座っていました。しかし、バスを降りる時、おばあさんは席を譲ってくれた男性だけでなく、後ろの席の少女にも、『ありがとう』と頭をさげ、『席を譲ろうとしたことがわかって良かったです』。おばあさんの二言に

少女は人を思いやる心を学んだ。
私たちも、席を譲ろうとしてなんとなくタイミンを失うことがあります。そんなとき、眠ったふりをしてその場をやり過ごすときもあります。どちらも気まずいものです。譲らねばと思えば思うほど、それができなかつた自分に落ち込んでしまいます。そんなとき、このおばあさんのように声をかけられたら、どんなに助かるでしょうか。

おばあさんの「ありがとう」は、「あなたを見ているよ」という神様の声と同じです。わたしと共にいてくださる神様の「こだわり続ける優しさ」がそこにあるります。

もうひとつの十字架の神学

二世紀の宣教論

マーク・トムセン著
宮本 新訳

リトン出版



定価 2,000円

鶴ヶ谷・仙台教会牧師
藤井邦昭

信徒の声

ボランティア活動と伝道

市ヶ谷教会 梅田満枝



毎月十二日から寄付を募って

「日本国際ボランティアセンター（JVC）」という、アジア・アフリカの国々で、地域開発や人道支援の働きをしているNGOがあります。このNGOをベネフィット（チャリティー）コンサートを通して、二十年以上にわたり支援し続けている、元ルーテル教会の宣教師夫人がいっしょにいます。

彼女の名前はアイネス・バスカビルさん（写真左）。アイネスさんは毎年十二月に、企業から寄付を募って、東京と大阪で「JVC国際協力コンサート」を開催し、収益金をこのNGOに捧げていらつしやいます。曲目は、メサイアと「クリスマス・オラトリオ」を毎年交互に演奏します。

私は延岡教会に通っていましたが、二十年以上前、久留米教会で奉仕されていたバスカビル先生ご夫妻と、英語キャンプなどでお会いしていました。そういう昔からの縁で、定年後はなにかボランティア活動をしたかと思つていました。私は、定年を迎えた時、アイネスさんのお誘いに応じ、以来十年程コンサートのお手伝いをさせていた

だいています。コンサートの目的は、もちろん、支援を必要としている人々を助けるための資金集めです。ひたすらに他国の人々のために、毎年、数千人規模の人を集めるチャリティーコンサートに成功させているアイネスさんの熱意と行動には尊敬の念を抱いている私ですが、それ以上に彼女をすごいと感じるのは、彼女の宣教する力です。長い年月続けてこられたこのコンサートは、彼女にとって宣教の実践の場でもあるのです。「神様の愛を分かち合い、隣人と



も互いに愛し合いなさい」というみ言葉を実践されているのです。メサイアと、クリスマス・オラトリオを曲目に選んだ理由を「日本の皆さんにキリスト教と神さまのことを知って貰いたいから」と教えてくださったことがあり、私もまもなくコンサートの時期です。



私たちが保育者（大人）もぜひ子どもたちにも見せたい、と言っている者でありたいと思つています。

牧師の声

私の愛唱聖句

田園調布教会 杉本洋一

高校生だった、教会生活を始め、間もない頃、悲しい忘れられない出来事がありました。親切に声をかけてくださった年配の婦人が、ほどなく礼拝に来られなくなり、私は、キリスト者は誰れも、悩みも苦しみもなく、優しく、心が平安で、喜んでいようと一定のイメージを持ちながら足を教会に向けていたのですが、争いもなく、いざこ

ざもないのが教会の集まりの姿であるというのを想像してしまいました。当時、教会の中には、学園紛争の影響があり、70年代の世に開く歩みも教会の内部にあつたので、一方、熱心に、世に向けての「クルセード」のような大集会・福音伝道もありました。

気になつてきたあの婦人はどうされたか尋ねる機会がありました。聞いた答えは、彼女は自死をしたというものでした。大変な驚きを感じ、教会生活への不安を抱き、自分の期待していた思いと

の大きなギャップがあるのに、戸惑いを憶えませんでした。聖書を読む限りは、分らないことがあつても、なるほどと自分で納得しようとしていたのですが、自分で思い描いた教会生活と現実のそれとは大きな隙間があつたのです。考えてみれば、自分が教会生活を理想化して思い描けば、描くほど、現実とは離れて、空しく受け止めることしかできなくなることを思い知らされるきつかけでした。自分なりに、これを受け止めるのに時間がかつたのです。

結局、教会に対する大きな期待と暖かな交わりを求めていたのではありません。これは、今も変わりません。「主において」喜ぶことが、この時に、学んだことでした。自分の思い描く「あるべき姿」を求め続けているかぎり、その間の中で、行ったり来たりするしかあり



きな期待と暖かな交わりを求めていたのではありません。これは、今も変わりません。「主において」喜ぶことが、この時に、学んだことでした。自分の思い描く「あるべき姿」を求め続けているかぎり、その間の中で、行ったり来たりするしかあり

に、とても大切にしている行事です。各家庭から持ち寄った、果物・野菜・花などをホールに集めて感謝祭の礼拝をします。幼稚園の畑で育てた野菜も一緒に捧げます。礼拝後、野菜や果物を少しずつ食べることもあります。



園長日記

「神さまありがとう」

11月になり、暑かった熊本でもすっかり秋の色が濃くなってきました。園庭の木々は色づいて、どんぐりの木からは毎日たくさんの実が落ち、どんぐりのじゅうたんができています。また、幼稚園のまわりには眞原、江津湖など自然に恵まれたところがいろいろあつて、園外保育（おさんぽ）を通して秋を感じることもできます。11月はいつにも増して「神様ありがとう」が多い季節のように思います。

子ども祝儀礼拝

全園児が教会堂で礼拝をした後、神様に愛され、守られて成長したことを感謝し、これからは元気で大きくなり、一人ひとり牧師先生から祝福していただきます。子どもたちの神妙な表情に胸が熱くなりました。

収穫感謝祭

キリスト教の幼稚園ではほとんど（みんな）行われていると思いますが、当園でも毎年11月の20日（前後）に収穫感謝祭をします。6月の「花の日」と同じように、

日本福音ルーテル教会の社会福祉施設の紹介 その8

社会福祉法人キリスト教児童福祉会
児童養護施設

聖母愛児園

施設長 石嶺 昇

聖母愛児園（カトリック）の始まりは、一般病院（中区山手町82）の玄関先に子どもが放置されていた昭和21年4月です。その後、駅や道路に置き去りにされている乳児を警察がシスター達のところへ連れてくるようになり、聖母病院からも同じような乳児が届けられました。

シスター達は、一般病院（中区山手町82）内で子どもたちの養育を始めました。昭和20年代30年代は、ドイツ・カナダ・ハンガリー・ポーランド・イングランド等のシスター達が活躍していました。昭和21年8月までに、子どもたちを22名預かり、翌年8月までには136名受け入れるなど、



献身的に働きました。昭和20年代は戦後の混乱期であり、生後間もない子どもたちが放置されており、預かってでも疾病や栄養失調等で死亡に至るケースが多く、献身的に働く職員たちの心中は、穏やかではなかったことでしょう。

平成22年8月には新築物が竣工しました。これまでの中舎制システムから、マンション型の小舎制へと、支援システムを移行しています。5LDKの間取りに子どもたち6名と職員が生活を営んでいきます。炊事、洗濯、清掃、子育てなど、全てがこの中で行われ、子どもたちは男女混合縦割りで構成されています。

また、昭和25年から昭和35年までは、アメリカのご家庭との養子縁組があり250組程の縁組みが成立していました。社会福祉法人キリスト教児童福祉会では平成18年10月に社会福祉法人聖母愛児園から法人移管を受け、この施設の経営に当たることになりました。

●ホームページ
社会福祉法人キリスト教児童福祉会
http://kjpfn.org/
http://seibojifen.com/



平成22年8月には新築物が竣工しました。これまでの中舎制システムから、マンション型の小舎制へと、支援システムを移行しています。5LDKの間取りに子どもたち6名と職員が生活を営んでいきます。炊事、洗濯、清掃、子育てなど、全てがこの中で行われ、子どもたちは男女混合縦割りで構成されています。

高齡者伝道シリーズ
「遠慮しないで、訪問を願う」

下関・宇部・厚狭教会牧師
小勝奈保子

訪問へ向かう私の原動力、それはスリランカでの体験が源となっています。ワークキャンプで子どもたちの施設に滞在しました。その時、敷地内にある教会のメンバーのおじさんが入院したというので、シスターは施設の子どもたちと日本人を連れて、おじさんを見舞いました。そこには娘さんとお孫さんがいて、シスターは娘さんと話した

後、祈り、みんなで讃美歌を歌いました。高齡者の在宅介護の仕事を9年間しましたが、そのような場面に遭遇したことがありません。牧師が来訪し、祈り、讃美歌を歌う、子どもたちの姿を見かける機会も少ないように思います。

訪問について、これぐらいで牧師を呼んではと遠慮されたり、いつ牧師を呼んだらよいか分らない、という声も聞かれます。牧師と妻が祈っている間、息子が家族は遠慮して席をはずしてしまってもいい。しかし、頼るべき方を示す祈りの場面に立ち会ったことは、子や孫たちにとっても大切な出来事です。教会の中でこのような時、訪問をしてもいいのか話していただくようにしよう。牧師の訪問を支えるサポート体制も課題です。

ELCAの動向

昨年10月号の「うらな」で報じたように、2009年8月、アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）は賛成で特別声明（Affidavit）（動物と信頼）を採択し、それに基づき逐条審議で同性愛教職者の承認を可決した。この教会の決議は同性愛に対する偏見や差別をなくし、生活上のさまざまな権利が認められていく運動が20世紀初頭から始まった。欧米の長い歴史と無関係ではない。

アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）の現在の総会委員は450万であり、教会数は1万2,000である。その内、ELCAから脱退し、新組織「采国ルーテル教会（NALC）」を結成したのは現在のところ18教会であるといわれている。なお、9月11日付の「キリスト新聞」ではオハイオ州で8月26、27の両日開催されたNALCの発足会議にはタンザニアの福音ルーテル教会、エチオピアの福音ルーテル教会の代表も出席したと報じられているが、出席した2名はそれぞれの教会の正式代表ではなかったといわれている。

私の本棚から

杉本健郎著
「子どもの脳死・移植」
(タリエイツかもがわ 2003)



ルーテル・医療と宗教の会という、医療従事者、教職者、そして一般信徒からなる会をご存じでしょうか？ 宣教100年記念の年（1983）から東教区を中心に活動を続けています。今年の公開講演会（7月11日・雪ヶ谷教会）のテーマが「脳死と臓器移植」ともに命を考える。講師・聖公会引退司祭関正勝先生でした。現在、世話人代表の筆者は、その準備のため、脳死臓器移植関連の資料を見直していました。

この問題への杉本先生の熱い思いの背景に、ご子息が脳死状態となり、腎臓移植の提供者となったという事実があります。本書でも触れられています。杉本先生は、子どもの脳の専門家であり、その意味では、今後脳死判定に関与するかもしれない専門医です。そして同時に、臓器提供者の父親でもあるのです。

さて、見直した資料の中で、やはりこの一冊に引きつけられ、おもむき再読してしまいました。杉本健郎著「子どもの脳死・移植」(タリエイツかもがわ 2003)です。本書は、1997年の臓器移植法施行から6年の時期に執筆されました。杉本先生と筆者は、同じ小児神経学を専攻し、ほぼ同世代であり、杉本先生が重度障害、筆者は軽度障害という違いはあるものの、子どもの障害に関わる小児科医という点で共通しています。

この問題への杉本先生の熱い思いの背景に、ご子息が脳死状態となり、腎臓移植の提供者となったという事実があります。本書でも触れられています。杉本先生は、子どもの脳の専門家であり、その意味では、今後脳死判定に関与するかもしれない専門医です。そして同時に、臓器提供者の父親でもあるのです。

原 仁

河田稔牧師を偲んで

引退教師 石橋幸男



1958年、私が伝道師として益田に着任したとき、宇部のテール宣教師が関係教師だったので、毎月宇部教会に泊りがけ行つて、河田先生の開拓伝道振りを見ました。先生は多才

で、「スポーツ万能教師」と言われ、テニス、卓球、ボーリング、将棋、囲碁にすぐれ、これによって教会へ学生や青年を引き付け、体当たりの伝道を成功させておられた。

わたしは1962年に米国留学し、その後1964年、市ヶ谷の学生センター、市ヶ谷教会に着任。伝道方策推進委員として、当時松山教会で活躍中の先生など全国の諸教会を巡回した。

1970年に岡山に転任。同じ西教区の常議員として働くようになった。先生は教区長として、よく私宅に泊まれた。6年後大阪教会へ招聘されてくる前、私は教区長として、先生を松山から天王寺に移っていた。先生と励まして、天王寺教会と幼稚園を盛んにした。

先生には妙な欠点があった。高所恐怖症である。航空機が苦手であるのみならず、高層マンションの訪問もお出来にならなかった。しかし、勉強しておられるのを見たことはないが、日々の活動の中に説教の狙いをつけて学んでおられたのでしよう。従って、説教はボーリングでのストライク、球技では相手の弱点に

て、上諏訪(兼・岡谷)、熊本、釧路の各教会を歴任し、さらにドイツで交換教師として十年間の奉仕をし、帰国後は現在の九州ルーテル学院チャプレン、その後、市川教会に赴任、二〇〇〇年に引退された。

日本福音ルーテル教会が戦後、日本基督教団から離脱をして、再建日本福音ルーテル教会を組織し、同時に日本ルーテル神学校が再開されたその第一期生、六名中の一人(他の同期生には南里・林の諸氏)であった。このほか、個人的集団であった印象を残している。戦後の未だ揺籃期の神学校の中で、教科範囲・教科レベルを超えて真剣に格闘していた姿を記憶している。

当時は現在のように日本語のキリスト教書物が在るわけもなく、教科書の多くは英文教科書であり、多くは、その範囲で精一杯。しかし、それで、満足できない様子であった。同氏の寮室下アには雑談談話室と張り紙がしてあった。

最後に、病気に対する警戒心が足りなかった。「基会所へ行って打ち合っていたら、途中でふらつとしてやめて帰った」、「聖書研究をみなさんの前でしていたら、口が廻らなくなつて、途中でやめた」と言っていた。

谷口博章牧師を想う

引退教師 前田貞一



谷口博章牧師が神様の召しを受け、故人の籍に移られたのはこの二〇一〇年九月二十五日のこと、心に残る先輩である。神学校卒業直後一九五三年に名古屋復活教会に赴任、その後米国留学を経

て、上諏訪(兼・岡谷)、熊本、釧路の各教会を歴任し、さらにドイツで交換教師として十年間の奉仕をし、帰国後は現在の九州ルーテル学院チャプレン、その後、市川教会に赴任、二〇〇〇年に引退された。

日本福音ルーテル教会が戦後、日本基督教団から離脱をして、再建日本福音ルーテル教会を組織し、同時に日本ルーテル神学校が再開されたその第一期生、六名中の一人(他の同期生には南里・林の諸氏)であった。このほか、個人的集団であった印象を残している。戦後の未だ揺籃期の神学校の中で、教科範囲・教科レベルを超えて真剣に格闘していた姿を記憶している。

当時は現在のように日本語のキリスト教書物が在るわけもなく、教科書の多くは英文教科書であり、多くは、その範囲で精一杯。しかし、それで、満足できない様子であった。同氏の寮室下アには雑談談話室と張り紙がしてあった。

当時は、海外補助の下で、春秋二回一泊旅行が行われていたが、その頃から、海外補助金依存に強い抵抗を抱いておられた。ある年の旅行の朝、出発前の点呼の際に谷口氏の欠席に気付いた教授の指示で、隣室である私が呼びに行つた。ノックをしても応

答がなく、教授にその旨を伝えた。教授は私を同道して再度部屋に向かい、私の部屋の椅子を出させ、それに乗って欄間窓から部屋を覗き、「居るのは分かってる。出て来なさい」と声高に言った。中から「本人が「居ない」と言っているのだから、留守に間違いないとせんでい」と言われた。彼は欠席した。補助金で楽しんでいると精神が腐ると云う持論からの拒否であった。

堅物一辺倒ではなく、ユーモアもあり、真剣であり、一徹であり印象深い先輩であった。「福音と律法を問い続ける」という安直な福音主義

義(…イズム)について、「…イズム」は依存症・中毒に他ならない。「福音主義」は福音を堕落させる」と言っていた。神学校卒業後話し合う機会は無くなったが、氏が到達している境地を伺いたいと何度も思った。に彼は甦っているだろう。

著任者 引退者紹介 (着任) 2010年9月1日付 主任教師 ボウツカ・マルツェイ 東教区・スコミ教会 信使宣教師 ジョムラ・ヒロアキ&パイビ (退任) 2010年8月31日付 教会委員終了 松隈貞雄(引退教師) 西教区・宇部教会 連絡先: 国立病院機構 山口宇部医療センター 〒755-0241 山口県宇部市東波岐85番地 7病棟



宣教会報告

6月常議員会の議決に従い、2009年10月6日(水)と7日(木)の両日、ルーテル市ヶ谷センターを会場に2010年度の「宣教会」が開催された。出席者は、議長をはじめ本教会の役員、事務局スタッフ、信託管理員、それに各教区から各々3名、合計25名程度である。今回の主な議題は、各教区の宣教会勢、教会共同体の点検、今後の方向性、#4期総会の方策の向けての準備協議、それと先の総会から付託され、財務委員会が作成した「教会年金負担計算式案」の説明が行われ、そこにて適切な意見と提案が出されたので、これらを踏まえて、来年度施行を図るためにも、常議員会に最終案を提議する予定である。各教区の宣教会勢に関しては、各教区長による各々宣教会方針及

び教区宣教会勢の課題等の発題を受け、教と施設との関係、そこでチャペレンシーの動きと意義、さらに現行の教会種別の見直し(必要性等の意見が出された。また、2008年総会で最終的決議がなされ、宣教会勢の一として実施されている教会共同体)に関して、各教区において取組において違いがあり、従来の地区宣教会委員との整合性等、問題点等が幾つか残されているにしても、将来の地区宣教会勢に備えていくために、教会共同体の全体的必要性については一定の共通理解を持つた。

北海道特別教区の今後に関しては、1978年からの北海道推進強化計画、1981年より特別教区設置からすでに30年以上の歴史を刻んできているが、実態は規則上の教区成立基準である12教区ではなく、教会数が4教区であり、特別協力金等に

東地域教師会退修会報告

毎年秋恒例の教師会退修会は9月14日と15日、御殿場にて開催。講師に江口再起氏を迎え、「ルター神学と教会の「今」」をテーマに行われた。参加者は講師を含めて30名。

江口氏は今年7月に「神の仮面」を著し出版されたので、これをテキストとして事前に各自学習し、講演と議論に臨んだ。

江口氏自身ルーテル教会の教

職者、今は東京女子大学教授という職にあるため、外から自分の教会を眺めることができるというユニークな立場にいたことが、今回の主題をより興味深くしてくれたいように思う。社会問題をルーター神学で斬る手法もさることながら、同時に、ルーター派教会の特徴、ルーテル教会の牧師像などを、氏自身が仕事上出会う他教派の牧師たちとの会話や、

大学でのやりとりと比較しながら語る独自の見解は、とても鋭くかつ心強かった。喉をからしたる熱弁に役員もよっやく気づき、そつとペットボトルの水を差し出すも手を着ける気配もたつた。今度もそれは、「と水をコップに注いで飲むが、ひょっとお水をい